

# 今こそ記憶に留めなければ

梶村道子(ベルリン・女の会)

ベルリンの中心地にある「殺害された欧州ユダヤ人の追悼碑」やゲシュタポ跡地に建設された「テロルの地勢展」。2000年代半ばに完成したこれらは、いつも観光スポットとして賑わっていますが、そんな街の喧騒から外れたところに、加害の歴史を記憶するひとまとまりの碑があります。

## 完成まで30年かかった「記憶の場所」

1938年11月のポグロムから50年後の1988年、強制移送されるユダヤ人の収容施設に転用されたシナゴーグ跡に、その史実を刻んだ碑が建ちました(『wamだより』vol. 47)。そこから歩いて30分あまりの貨物駅跡を見下ろす陸橋には、1987年にできた強制移送の碑があります。移送される人々は、シナゴーグからこの貨物駅まで街中を歩かされました。シナゴーグ跡と陸橋の碑、この二つは互いに補い合いながら一つの歴史を語っています。

陸橋の碑が、人々を死へと運んだ旅の始発点である貨物駅跡に建たなかったのは、当時は西ベルリン市内を通る鉄道が東ドイツの管轄下にあり、施主の西ベルリン市にはそこの土地利用権がなかったからです。ドイツ統一後その事情は変わったものの、貨物駅跡は鉄道事業に不要な施設として再開発の対象にされます。周辺一帯が倉庫街へと変容する中、区民の声に動かされ、ミッテ区は貨物駅跡のわずかな土地を確保します。そして2017年の6月、戦後72年、東西統一から27年、陸橋の碑の設置からは30年も後に、加害の現場だった貨物駅の跡地にあらためて「記憶の場所」ができました。



陸橋の上の碑。天国への途中で途切れた階段を表している。貨物駅は右手前方にあった。

## ヨーロッパアカマツの森

ほんの一部が残った貨物駅のホームと線路は歴史の痕跡として整備され、その向こうに、あらたに植えられた20本のヨーロッパアカマツが小さな林をつくっています。南側と北側を走る道路への出口には、この「記憶の場所」の由来を説明する錆鉄板が立っています。

かつて線路は、人々が差別され排斥された土地と殺害された土地とをつないでいました。殺戮の現場は、ヨーロ

ッパアカマツの森が南北に広がる一帯、バルト三国、ポーランド、ベラルーシ、

貨物駅跡の「記憶の場所」。左手前の端だけがわずかに残ったホーム。その向こうに強制移送に使われた69番線の線路と松林。69番線は第一次世界大戦中に兵隊輸送用に敷設された。

ウクライナの地でした。ラトヴィアのリガの郊外やベラルーシのミンスクに近い森では、欧州から移送されたユダヤ人が大勢殺されました。1942年6月26日にベルリンのこの貨物駅から移送された人々は、到着した日にミンスクの近くの森で射殺されています。20本のヨーロッパアカマツの林、それはその東欧の森の飛び地のようです。

ナチスドイツが殺害したのは、欧州から移送された人々だけではありません。ベラルーシのマールイ・トロステネツ、ウクライナのバビ・ヤール峡谷やコリュキウカ、リトアニアのカウナスの第9要塞、あるいはヴィリニュス近郊のポナリの森、これらの地名が現地の人々に呼び起こすのは、そこの住民であったユダヤ人や、ボルシェビキやパルチザンとみなされた人々が連行されて殺害された記憶です。しかしアウシュビッツ、トレブリンカなどの絶滅収容所の名を知る人は多くても、当時はソ連邦だった上述の地で起きたことは、ドイツではあまり知られていません。

## あらたなドキュメントセンター

2020年10月、連邦議会は第二次世界大戦におけるドイツの欧州占領の歴史を扱うドキュメントセンターの建設計画を採択しました。「第二次世界大戦と欧州におけるドイツの占領支配」と冠してベルリンに建つ予定の施設の設立理由を、ドイツ歴史博物館チームは2022年6月に発表した企画書でこう述べています。「ドイツの戦争遂行と暴力支配についてドイツ人がもつ知識は、専門家を除けば非常に乏しい。戦争と占領が、被占領国とそこで迫害された多様な住民集団にもたらした中心的な意味との落差はあまりにも大きい」。だからこの歴史を伝え、被害者を追悼する空間が必要だ、と。企画書は、欧州全域の専門家や被害者団体、市民と対話をしながらまとめられ、完成後も共同で教育事業や研究が進められるとのことです。

ロシアのウクライナ侵略の過程で、ドイツは軍備増強に踏み切りました。「だからこそ、1939～1945年とはなんだったのかを、ドイツは今一度理解するべきだ」とドイツ歴史博物館のラファエル・グロス館長は言います。「ドイツは欧州の文脈の中で自国の歴史にもっと向き合う必要があるのだ」と。(写真はいずれも筆者提供)

